

# 教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 高野 泰

学位: 文学博士

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
西洋史、地域研究、科学社会学・科学技術史	南北アメリカ史、北アメリカ、科学史、医学史	
主要担当授業科目	比較文化論、アメリカ社会文化論、Reading I、英語 IIA、英語 IIB 口頭表現演習、スタディスキル	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書・教材 1)『21世紀アメリカ社会を知るための67章』	平成14年9月	共同で編著に当たるとともに、「ケネウィック原人」、「インターネット文化」、「音楽とインターネット」の各項を執筆した。21世紀初頭までのアメリカ合衆国の様々な問題について、大学生を対象に紹介する書である。執筆 pp.72-75, 99-102, 232-235.
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許		
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての特記事項		
4. その他		

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 『21世紀アメリカ社会を知るための67章』(再掲)	共編 著	平成14年9月	明石書店	監修：明石紀雄、共編著：赤尾千波、大類久恵、小塩和人、落合明子、川島浩平、高野泰。「ケネウィック原人」、「インターネット文化」、「音楽とインターネット」の各項を執筆した。21世紀初頭までのアメリカ合衆国の様々な問題について、大学生を対象に紹介する書である。執筆 pp. 72-75, 99-102, 232-235.
(学術論文) 1. 「19世紀前半合衆国の社会改革運動研究—Temperance Movementをめぐる社会史的考察」(修士論文)	単著	平成5年	筑波大学大学院修士課程地域研究研究科	19世紀前半の社会改革運動とりわけ多義的な「テンペランス」運動は、単に福音主義的プロテスタンティズムの枠内に留まるものではなく、結果として工業化に利するような新しい生活様式を提供した。それによって当時のアメリカ人は、19世紀前半の社会的変化と対をなす、精神的「自己」改革を成し遂げたのである。
2. 「ワシントン運動—19世紀前半合衆国における改革運動の一形態」	単著	平成5年	『欧米地域研究』第9号、40-58頁	1840年に6人の飲んだくれが創立したワシントン禁酒協会の活動、いわゆるワシントン運動は、最も下層な労働者階級を禁酒改革に参入させていった。それは禁酒改革の大衆化を示すと共に、禁酒という道徳律を自ら受け入れていくという改革の自己改革的な側面をも示すものであった。
3. 「禁酒改革と中産階級—婦人キリスト者禁酒同盟とフランシス・ウィラードをめぐる一考察」(修士論文)	単著	平成8年	筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科	中産階級とは、民族宗教集団ではなく、「ヴィクトリア朝的」文化の背景にある価値体系を共有する集団とみることができる。19世紀後半の禁酒改革は、こうした価値をめぐって惹起した政治的な摩擦によるものだった。婦人キリスト者禁酒同盟は初めて女性が主導したが、その性格はきわめて中産階級的価値を背景としたものだった。
4. 「ライマン・ビーチャーと禁酒運動—『六つの説教』を中心に」	単著	平成10年3月	『社会文化史学』第38号、1-16頁	1811年から1826年までの間に、ビーチャーの禁酒思想は大きく変化した。第一に、聖職者や教会員の禁酒からより広い大衆の禁酒へと目標を広げた。第二に、既存の酒場に対するライセンス法から酒類の製造販売を禁ずる法律へと改革の手段を転じた。これらの変遷の背景には、当時の平等主義的な社会の成立があった。そうした社会の潮流の変化が、ビ

5. 「禁酒を語る心性—十九世紀初期アメリカにおける「自己管理」の問題化」	単著	平成 11 年 3 月	『史境』第 38/39 号、54-69 頁	<p>一チャーの主張を自己の改革から、他者の啓蒙・改革へとシフトさせていった。</p> <p>19 世紀初期の禁酒を勧める出版物では、「不節制な飲酒」が身体と精神に病いを引き起こすという医学的言説と、貧困との結びつきを警戒する経済的言説が、主に語られていた。こうした言説によって「不節制な飲酒」が問題化されたのは、飲酒が「管理能力の喪失」に到ると意識されたことによる。この「自己管理」へと向かう心性が、禁酒という価値を生み出したのであった。</p>
6. 「犯罪、身体、刑罰—共和主義者の刑罰改革」	単著	平成 12 年 3 月	東京成徳大学『人文学部紀要』第 7 号、59-76 頁	ベンジャミン・ラッシュを初めとする 18 世紀末のアメリカ人は、独立革命の次に社会の変革を志した。中でも多くの支持者を集めたのは、刑罰改革であった。刑務所待遇改善協会の結成に関わったラッシュは、自らの著作の中で公開刑や死刑といった当時の刑罰のあり方に反対した。こうして犯罪者の更生や社会の徳性の向上を目指す改革を導いた心性はしかし、人道主義というよりは、抑圧・管理を生み出すものとして機能したのである。
7. 「ベンジャミン・ラッシュと精神医学の誕生」	単著	平成 13 年 3 月	東京成徳大学『人文学部紀要』第 8 号、63-80 頁	アメリカが独立に至ろうとしていたちょうどその時、精神の病いはアメリカで医学的に探究され始めた。「アメリカ精神医学の父」と呼ばれたベンジャミン・ラッシュは精神の病いを身体の医学と密接に結びつけた。彼は精神を自己管理できるようにするためには、治療も監禁も懲罰も区別しなかった。精神医学の誕生の背景には、自己管理を旨とする新たに生まれた共和主義的人間像があったのである。
8. 「共和主義の精神、共和国の身体—ベンジャミン・ラッシュの『医学のアメリカン・システム』」	単著	平成 15 年 3 月	『東京成徳大学人文学部紀要』第 10 号、69-82 頁	アメリカ建国初期に医師・医学教育者として絶大な影響力を持ったベンジャミン・ラッシュは、「劇的療法」をアメリカにおいて有効な医療とした。後に「医学のアメリカン・システム」と呼ばれるラッシュの医学理論は、共和主義国家アメリカにもっとも相応しいものとして、アメリカ独立革命と平行して形作られていったのである。
9. 「『サイバースペース独立宣言』10 周年+α—アメリカ起源のネット文化とその行方」	単著	平成 19 年 3 月	東京成徳大学『人文学部紀要』第 14 号、77-94 頁	ジョン・ペリー・バーロウの『サイバースペース独立宣言』は、ネット空間が現実世界よりも自由であるという思想を提起した。それは、ネット文化が極めてアメリカ的な価値に基づいて形作られ

<p>10. 「建国期アメリカにおける共和主義文化の創造—ベンジャミン・ラッシュの temperance にみる」</p>	<p>単著</p>	<p>平成19年9月</p>	<p>『史境』第55号、64-88頁</p>	<p>たことを意味している。その理由の一つは、ネット自体の開発の背景に、アメリカ的な価値があったからである。ネット文化はいまや、さまざまな面でアメリカ的な価値から離れているように見えるが、それもまたアメリカ的であるといえる。</p> <p>temperance という語は、本来衛生学において「節制」を指すものであった。アンソニー・ベネゼーが著書の中で飲酒を非難したときには、「節制」の文脈においてなされた。アメリカ合衆国に至る独立革命の過程と平行して、「節制」から「禁酒」へと意味の読み替えがなされた。独立後のアメリカ人が禁酒を受け入れて内化していったことを考えると、その読み替えを提唱したベンジャミン・ラッシュは、「禁酒」を価値とする新しい共和主義の文化の創造に貢献したといえる。</p>
<p>(その他)</p> <p>1. (学会報告)「19世紀前半アメリカ合衆国改革史—「禁酒」運動を中心に」</p> <p>2. (学会報告)「ライマン・ビーチャーと temperance 思想」</p> <p>3. (学会報告)「19世紀前半合衆国の temperance 運動の新観点—研究史を軸に」</p> <p>4. (学会報告)「禁酒改革の一形態—初期WCTUを中心に」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成5年10月</p> <p>平成6年4月</p> <p>平成6年4月</p> <p>平成8年10月</p>	<p>歴史人類学会第14回大会</p> <p>社会文化史学会例会</p> <p>アメリカ史研究会</p> <p>歴史人類学会第17回大会</p>	<p>アメリカ禁酒協会や合衆国禁酒同盟を軸とする禁酒改革は、奴隷解放運動などと同じく当時のアメリカ人にとって重要なものであった。その理由は、当時の社会変化を背景にして、禁酒というものがその変化に順応しようとする生活様式の変革をもたらすものであったためである。</p> <p>19世紀前半の禁酒運動の指導者の一人であったライマン・ビーチャーは、「不節制な飲酒の性質、契機、兆候、害毒と矯正法についての六つの説教」で禁酒を訴えた。彼の説教は、ライセンス法による規制を疑問視し改革組織の自発的な活動を評価している点で、禁酒改革の正統的な歴史解釈であった「社会管理」説の再考を促すものと言える。</p> <p>従来の禁酒改革研究は、運動の全国的な組織化の過程や宗教者の指導的役割を強調するものであった。しかしながら政治問題化していく傾向や自助組織としての禁酒協会の存在、アルコール消費量の変遷はそうした解釈に疑問を投じるものであり、今後研究を深めていく上で、改革の起源を探ることが必要であろう。</p> <p>1873年に結成された婦人キリスト禁酒同盟は、女性が初めて指導した禁酒改革組織であった。しかしながら、同盟の参</p>

<p>5. (学会報告)「テンペランスの科学—ベンジャミン・ラッシュ (Benjamin Rush: 1745-1813) の「共和国」における」</p>	<p>単著</p>	<p>平成9年6月</p>	<p>日本西洋史学会第47回大会</p>	<p>加者は主に中産階級であり、また女性の地位向上のための自己改革的な特徴を有している点で、それ以前の禁酒改革を受け継いだものと言える。</p> <p>独立宣言の署名者の一人であるベンジャミン・ラッシュは、「禁酒運動の父」とも呼ばれる。彼は18世紀末から禁酒を唱道したが、実際は彼の禁酒思想は医学的論理に裏付けられたものであった。そして宗教的な背景を強調する定説に反して、彼の医学的禁酒の思想は、後の改革者に大きな影響を与えていた。</p>
<p>6. 「書評—岡本勝著、『アメリカ禁酒運動の軌跡—植民地時代から全国禁酒法まで』」</p>		<p>平成9年9月</p>	<p>『史境』第35号、81-88頁</p>	
<p>7. (学会報告)「ベンジャミン・ラッシュの禁酒思想にみるアメリカ建国期の心性」</p>	<p>単著</p>	<p>平成10年9月</p>	<p>西洋史研究発表会</p>	<p>「建国の父祖」の一人であるベンジャミン・ラッシュは、多岐にわたる分野で活躍した。医学者として名声を保った傍ら、独立をめぐる政治的活動でも出色であり、かつまた様々な改革運動にも先駆的に携わった。こうしたラッシュについては建国期の人間像を捉えるに当たって、彼の禁酒思想とその背後にある共和主義の理念を結び付けることは、建国史の新境地を開くであろう。</p>
<p>8. (学会報告)「禁酒を語る心性：「自己管理」の問題化—アメリカ史における心性史の可能性」</p>	<p>単著</p>	<p>平成11年3月</p>	<p>社会史研究会</p>	<p>アメリカ史の文脈に、心性史の技法の導入を試みた。1801年から1819年の間に書かれた禁酒を勧める出版物では、専ら禁酒を医学的あるいは経済的な問題として語った。そうした言説の背景には、飲酒と「管理能力の喪失」とを結び付けた心性が存在した。この「自己管理」へと向かう心性が、禁酒という価値を生み出したのであった。</p>
<p>9. (学会報告)「temperance という価値の生成—Benjamin Rush の心性史」</p>	<p>シンポジウム</p>	<p>平成11年11月</p>	<p>中・四国アメリカ学会第27回年次大会シンポジウム</p>	<p>「禁酒運動の父」ベンジャミン・ラッシュが節酒・禁酒を意味する「テンペランス」を説いたのは、医学的議論を通してであった。それはしかし、単に当時の医学理論を応用したというよりは、共和主義者としてのラッシュが飲酒そのものを問題視する心的傾向(心性)を有していたからである。それが「テンペランス」という価値を生み出すことになった。</p>

<p>10. 「書籍紹介—大西直樹著、『ピルグリム・ファーザーズという神話—作られた「アメリカ建国」』、佐藤良明著、『ラバーソウルの弾み—ファービートルズと60年代文化のゆくえ』」</p>	<p>単著</p>	<p>平成 17 年 3 月</p>	<p>『【本はおもしろい】別冊 アメリカが見えてくる 50 冊』、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所編、58-59、96-97 頁</p>	
<p>11. (学会報告)「ニュートン主義、公衆衛生、禁酒—18 世紀医学の奇妙な展開」</p>	<p>単著</p>	<p>平成 18 年 5 月</p>	<p>日本科学史学会第 53 回 年会総会一般講演</p>	<p>19 世紀に流行したアメリカ禁酒運動の起源は、ニュートンの影響を受けた機械論的医学観に求められる。その経緯は、ニュートン哲学の影響の下にある機械論的医学観を源泉として、18 世紀に衛生学が興隆してくる。そこから temperance という用語を借用し、際解釈することで、禁酒という思想および運動は成立したのである。</p>